View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

女子大学生における幸福の概念と幸福感の規定因

吉　村　　英
（本学教授）

本研究の目的は，幸福に関する自由記述のデータをテキストマイニングの手法によって分析することにより，女子大学生における幸福の概念を検討することにある。また友人関係，恋愛イメージ，キャリア意識などの要因が幸福感にどのような影響を与えているかについても実証的な検討を行う。

「幸福」とは何かという問題は，人類の永遠のテーマであり古くはギリシャ哲学においてもアリストテレスやプラトンを始めさまざまな哲学者によって深い考察が行われてきた。また近年においては日本はもとより世界中の国々において「幸福度」に対する関心が高まり，哲学，社会学，経済学，政治学など幅広い分野で実証的な研究が蓄積されるようになってきた。心理学においてもPositive Psychologyに対する関心の高まりとともに幸福感に関する実証的な研究が盛んに行われるようになり，「幸福」は心理学における最先端のトピックとなりつつある。

しかしながら30年ほど前までは，心理学の分野においても，幸福は主観的な概念であり測定不可能であるから学問的に扱う対象とはならないのではないか，という懐疑的な意見が先行していた。その当時は客観的な行動に表れる変数のみを研究対象とする行動主義的な考え方が強く，主観的な幸福感は研究対象とならないと考えられていた。その後，狭い意味の行動に限定するのではなく，人間の認知の在り方を含めたプロセス全体を研究対象としようとする認知革命を経て，幸福感などの主観的な概念も実証的な研究対象として認められるようになってきた。

このように現在では幸福感を実証心理学研究の対象として扱うようになってきたが，実証的であるためには幸福という構成概念の定義と，その測定方法（操作的定義）を明確にする必要がある。しかしながら幸福という概念の定義について統一した見解は今のところ得られていない。研究者によってさまざまな定義がなされ，その定義に即した測定尺度が開発されているという状況である。

これまでの研究を振り返ると，幸福をどのように考えるかについては大きく分けて２つのアプローチ方法がある（Huppert and Linley, 2011）。１つはヘドニック（Hedonic）アプローチであり，快楽（pleasure）が多く苦痛（pain）が少ないことが幸福につながるという考え方である。例えばDiener（1984）は，幸福を意味する概念として ’subjective well-being’ という用語を用い，ポジティヴな感情とネガティヴな感情のバランスおよび人生の満足感から幸せは構成されていると述べている。つまりポジティヴ感情の経験が多く，ネガティヴ感情の経験が少ない，そして人生の満足感が高い人が幸福な人であるという考え方である。もう１つはエウデモニック（Eudaimonic）アプローチであり，自分をよく知り，目標に向かって自分の能力を十分に活用することが，意味のある幸福な人生につながるという考え方である。例えばRyff（1989）は，幸福を意味する概念として ’psychological well-being’ という用語を用い，自律性（autonomy），環境の精通（environmental mastery），人生の目的（purpose of life），他者との良好な関係（positive relationships with others），自己受容

(self-acceptance)，および個人としての成長(personal growth）の６つの次元から幸福は構成されると考えている。その後それぞれの考え方に基づく研究が蓄積されてきたが，最近ではこの２つの考え方を実証的なデータで比較し，統合しようという試みも行われてきている(Waterman, 1993；McGregor & Little, 1998；Ryan & Deci, 2001；Kashdan, Biswas-Diener, & King, 2008)。

ここに述べた２つの考え方は主に西洋哲学に基づくものであるが，東洋哲学では幸福の捉え方も異なってくる。例えば孔子にとっての幸せとは「老人に安心され，友達に信じられ，若者に慕われる，穏やかな心境」である（金谷，1963)。また文化心理学の最近の成果は，国や文化の違いにより幸福の捉え方が大きく異なっていることを示している。歴史的，文化的背景の違いから，また年齢や社会階層といった所属集団の相違から，さまざまな幸せの概念が存在すると考えられる。したがって特定の社会集団を対象として幸福感を測定しようという場合には，その集団における幸福の概念を確認し，測定尺度が妥当性を持つものであるかを検討することが重要であると思われる。

このような考えに基づき，本研究では女子大学生を対象として幸福の概念の検討を行う。女子大学生は幸福をどのように捉えているのであろうか。この問題を検討するためには，研究者の視点で作成された測定尺度を用いるだけでは十分ではないと考えられる。そこで本研究では女子大学生の自由記述を収集し，回答者の視点から幸福がどのように捉えられているかについて分析を行う。具体的には「最近幸せだと感じたのはどういうとき（どのようなこと）ですか」という幸せの経験を尋ねる質問と，「あなたにとっての幸せとは何ですか」という幸せの定義に関する質問を行い，自由記述による回答を得る。最初に幸せの経験を尋ねるのは，具体的な経験の方が想起しやすく，回答も容易であると考えられるからである。ここでの回答にはヘドニックな内容の記述が多くみられるのではないかと予想される。また幸せの定義について質問するのは，具体的な経験を踏まえてより抽象的な「幸福観」についても述べてもらいたいと考えたからである。ここでの回答にはエウデモニックな概念が記述される可能性がある。

自由記述データの分析方法としてはテキストマイニングの手法を活用したい。テキストマイニングは文章（テキスト）から有益な情報を抽出するためのさまざまな方法の総称であり，自然言語処理，統計解析，データマイニングなどの基盤技術からなっている。以前はテキストデータの分析は人手で行うしかなく，大量のデータを定量的に分析することはかなりの困難を伴った。しかしながらテキストマイニングの手法を活用すれば，大量のテキストデータを効率的，客観的に分析することができる。テキストマイニングは，文章を自然言語処理してカテゴリ化する部分と，カテゴリ化したデータを統計的に分析する部分に分けることができる。本研究では前者の部分をIBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0によって行い，後者の部分をIBM SPSS Statistics 22によって行う。

本研究ではさらに女子大学生の幸福感に影響を与える要因についても検討を行いたい。吉村（2009，2012，2014）は女子大学生を対象とした研究において，キャリア意識が幸福感に大きな影響を与えていることを示している。キャリア意識の発達は職業選択の基礎となる。Havighurst（1953　荘司訳　1995）が述べたように，「職業を選択し準備すること」は青年期における重要な発達課題である。自分の資質や能力に応じた職業を選択し，その職業のための準備をすることは，充実した人生を送るための基盤となる。したがってキャリア意識の成熟度は，幸福感に大きな影響を与えると考えられる。本研究ではキャリア意識の成熟度を測定する尺度として下山（1986）の作成した職業未決定尺度を用い，幸福感との係わりを検討する。Havighurst（1953　荘司訳　1995）が述べた青年期の発達課題には，職業選択の他にも「両親や他の大人から情緒的に独立すること」，「同年齢の男女との洗練された新しい交際を学ぶこと」，「結婚と家庭生活の準備をすること」など

が挙げられている。そこで本研究ではキャリア意識と共に，友人関係や異性との関係が幸福感とどのように係わるのかについても検討を行いたい。友人関係については吉岡（2001）が作成した友人関係測定尺度を参考にし，実際にどのような関係の友人がいるのかを尋ねる。そしてその友人関係が幸福感とどのようにつながるのかについて検討を行いたい。異性との関係については，友人の場合と異なりすべての学生に恋人がいるとは限らない。そこで実際の恋人との関係ではなく，恋愛に対してどのようなイメージを抱いているかを尋ねる。金政（2002）が作成した恋愛イメージ尺度によって恋愛イメージを測定し，幸福感との係わりを検討したいと考えている。

本研究で得られるデータは，自由記述によるテキストデータと各測定尺度による定量的データである。テキストマイニングにより定性的なテキストデータも01型の２値データに置き換えることができる。つまり定量的な分析が可能となる。そこで本研究では自由記述の分析から得られた知見を，各測定尺度と関連させて分析を行いたい。具体的にはテキストマイニングを用いてカテゴリを作成し，そのカテゴリに関する記述が自由記述の中にみられるかどうかを確認する。そして特定のカテゴリへの言及があるか無いかによって，幸福感や友人関係，恋愛イメージの認知にどのような差異がみられるかについて検討を行いたい。

方　法

調査対象者　K女子大学の心理学専攻の女子大学生96名を対象として調査を行った。年齢は19歳から26歳までで，平均年齢は20.36歳（*SD*＝1.03）であった。欠損値はなく96名のデータに基づいて分析を行った。

調査時期　平成25年12月１日～平成26年１月31日

調査方法　集合調査法による質問紙調査。授業時間を使用して質問紙を配布し，回答を依頼した。研究倫理を配慮して，質問紙の冒頭で回答は無記名であること，および守秘義務の順守について記載し，さらに口頭で調査への参加は任意であること，および回答したくない項目は記入しなくてよいことを伝えた。

調査項目の概要　調査項目は大きく分けて，フェイスシート，幸せだと感じた経験，幸せの定義，友人関係，恋愛イメージ，職業未決定，幸福感尺度の７つの部分から構成されている。

調査項目と使用尺度　本研究では，以下の質問項目と４尺度を使用した。

①フェイスシート　年齢，性別，所属学部学科専攻，および学年（回生）について尋ねた。

②幸せの経験　「最近幸せだと感じたのはどのようなときですか，またどのようなことですか」という質問に対し，自由記述で回答を求めた。

③幸せの定義　「あなたにとっての幸せとは何ですか」という質問に対し，自由記述で回答を求めた。

④友人関係　吉岡（2001）が作成した友人関係測定尺度を参考に，文末表現を変更した尺度を用いた。吉岡（2001）の尺度は，こうあってほしいと思う理想の友人関係や，日頃の友人との付き合い方について尋ねるものであるが，本研究では実際にそのような友人がいるかどうかに焦点を当て，各質問項目の最後に「友人がいる」という語句を付け加えた。全27項目について，“まったくあてはまらない”⑴から“よくあてはまる”⑸までの５点尺度で回答を求めた。

⑤恋愛イメージ　金政（2002）が作成した恋愛イメージ尺度を用いた。本尺度は大切・必要，刹那的・付加価値，相互関係，独占・束縛，衝動・盲目的，献身的，成長の７因子からなっている。全28項目について，“まったくあてはまらない”⑴から“よくあてはまる”⑸までの５点尺度で回答を求めた。

⑥職業未決定　下山（1986）の作成した職業未決定尺度を用いた。未熟，混乱，猶予，模索，安直の５因子からなっている。ただし項目数については因子負荷量の大きさを参考にし，各因子から３項目を選択し，計15項目を採用した。この15項目について，“まったくあてはまらな

い”(1)から“よくあてはまる”(5)までの５点尺度で回答を求めた。

⑦幸福感　ハッピネス尺度（吉森・植田・有倉，1992）を使用した。この尺度は生活充実感，将来に対する積極的展望，ストレスバッファ（人間関係），自己肯定感の４つの下位尺度からなっており，それぞれ３項目，計12項目で構成されている。各項目について，“まったくあてはまらない”(1)から“よくあてはまる”(5)までの５点尺度で回答を求めた。

結果と考察

頻出語（幸せの経験）「最近幸せだと感じたのはどのようなときですか，またどのようなことですか」という質問に対して得られた自由記述式回答文を形態素解析し，よく用いられている語（動詞，名詞，形容詞）を抽出した。分析にはIBM SPSS Text Analytics for Surveys Japanese 4を用いた。なおIBM SPSS Text Analytics for Surveys Japanese 4では形態素解析にあたり「キーワード」の抽出を行うが，キーワードには単語だけでなく複合語も含まれており，「語彙」という概念に近い。表１は動詞，名詞，形容詞ごとに頻出語の一部を示したものである。各語の頻度は全調査対象者96名中何人がその語を使用したかを示している。

表１　頻出語（幸せの経験）

動詞	頻度	名詞	頻度	形容詞	頻度
いる	70	とき	66	おいしい	35
食べる	51	時	59	良い	8
する	27	友達	37	ない	8
くれる	19	家族	32	欲しい	8
行く	16	もの	31	楽しい	7
話す	15	人	28	新しい	3
買う	15	友人	24	安い	3
くる	14	自分	22	かわいい	2
入る	13	ご飯	15	面白い	2
寝る	12	風呂	11	懐かしい	2
会う	12	成人式	9	いい	2
過ごす	11	実家	8	暖かい	2
できる	10	好きな人	8	優しい	2
笑う	8	家	8	温かい	2
帰る	8	一緒	8	あたたかい	2
なる	7	ありがとう	8	仲が良い	1
遊ぶ	7	こたつ	8	早い	1
ある	6	バイト	7	下らない	1
もらう	6	布団	7	しょうもない	1
ほめる	5	恋人	6	一年深い	1
感じる	5	話している時	6	悪い	1
着る	5	彼氏	6	長い	1
祝う	5	親	5	寒い	1
考える	5	ペット	5	辛い	1
見る	5	おいしいもの	5	うれしい	1
総語彙数（158）		総語彙数（655）		総語彙数（33）	

注）複合語を含む

動詞として抽出された語彙数は158であった。「いる」「する」は非常に一般的な語であり，どのような文脈でも出現しやすい語であるといえよう。幸せの経験という観点から興味深いのは，「食べる」や「寝る」などの基本的欲求に関する語の頻度が高いことであろう。「話す」「会う」などコミュニケーションに関する語も頻度が高い。また「くれる」や「もらう」など他者からの行為を表す語が多いのも特徴的である。

名詞として抽出された語は655語と多くなっているが，これは複合語が多く含まれているためである。また質問文で「どのようなときですか」と尋ねているので，回答文の中に「とき」や「時」が頻出しているのは当然であると考えられる。幸せの経験という観点から興味深いのは，「友達」「友人」「家族」「実家」「恋人」「彼氏」など自分を取り巻く身近な人を示す語が多いことであろう。これは身近な人々との関係が幸福感と大きく係わっていることを示している。また「ご飯」「風呂」「こたつ」「布団」など暖かいものを示す語が頻出している。これらの名詞は，「食べる」「入る」「寝る」などの動詞とつながりを持つと考えられる。これは調査した時期が12月，１月と寒い時期であったことが大きく影響していると思われる。

形容詞は動詞や名詞と比較して総語彙数が少なく33であった。もっとも頻度が高かったのは「おいしい」であり，名詞の「ご飯」や動詞の「食べる」と深くつながっていると考えられる。また暖かいことを示す「暖かい」「温かい」「あたたかい」などの語も多い。「下らない」「しょうもない」「悪い」「寒い」「辛い」などネガティヴな内容を表す形容詞もみられるが，これらは否定語である「ない」とともに用いられることが多く，意味的にはポジティヴな内容を表している。

頻出語（幸せの定義）　ここでは具体的な経験というよりも，自分にとっての幸せとは何かというより抽象的な質問に対して回答を求めた。「あなたにとっての幸せとは何ですか」という質問に対して得られた自由記述式回答文を形態素解析し，よく用いられている語（動詞，名詞，形容詞）を抽出した（表２）。

表２　頻出語（幸せの定義）

動詞	頻度	名詞	頻度	形容詞	頻度
いる	47	自分	42	楽しい	18
ある	26	幸せ	23	ない	16
感じる	25	人	23	温かい	6
思う	22	もの	20	嬉しい	4
なる	14	家族	19	あたたかい	3
満たす	13	心	15	おいしい	3
できる	13	友達	12	うれしい	3
生きる	9	気持ち	11	満足していることではない	1
いく	9	健康	11	愛しい	1
する	9	私	10	いたい	1
過ごす	9	時	10	特別なことではない	1
笑う	7	とき	8	何気ない	1
とる	6	笑顔	8	大きい	1
食べる	5	中	7	明るい	1
持つ	4	好きな人	6	いい	1
落ち着く	3	友人	6	関係ない	1
困る	3	感情	6	少ない	1
忘れる	3	他人	5	難しい	1
認める	3	時間	5	暖かい	1
恵む	3	金	5	不安がない	1
かかわる	3	周り	5	怖い	1
喜ぶ	2	毎日	5	欲しい	1
追う	2	周りの人	5	面白い	1
与える	2	生活	5	よい	1
求める	2	一緒	5	高い	1
総語彙数（103）		総語彙数（293）		総語彙数（34）	

注）複合語を含む

動詞として抽出された語彙数は103であり，幸せの経験の場合より少なくなっている。「いる」「ある」「する」は一般的な動詞であり，どのような文脈でも出現しやすいと考えられる。幸せの定義という観点から興味深いのは，「感じる」「満たす」など感覚を表わす動詞の頻度が高いことである。「生きる」という語も幸せの経験の中では１度しか出現していないが，幸せの定義の中では頻度が高くなっている。これに対し経験の中では頻度が高かった「食べる」は，定義の中では頻度がかなり減少している。「笑う」や「過ごす」などは，経験の中でも定義の中でも同程度出現している。

名詞として抽出された語彙数は293であり，幸せの経験に比べてかなり減少している。最も出現頻度が高いのは「自分」という語であり「私」という語も多く出現している。その理由としては，まず質問文の影響が考えられる。つまり質問が「あなたにとっての幸せとは何ですか」という文であったために，回答に「自分」や「私」という語が多く含まれるようになったのであろう。しかしながら「自分」という語が含まれる自由記述を子細に検討すると，「自分」と周りの「人」との関係について述べたものが多い。「家族」「友達」「友人」「好きな人」などの頻度が高いことと考え合わせると，幸せの定義においても，自分と身近な人々との関係が幸福感に大きく係わっているように思われる。幸せの経験においてはほとんどみられなかった「心」「気持ち」「感情」など，心理的，精神的な語の出現頻度が高いのも，幸せの定義における回答の特徴であるといえよう。

形容詞として抽出された語彙数は34であり，幸せの経験の場合とほぼ同数であった。「楽しい」「嬉しい」などの気分を表す語の頻度が高く，「温かい」「あたたかい」などの語も多く出現している。「おいしい」も上位にランクされているが，出現数は幸せの経験の場合ほど多くはない。

以上，幸せの経験と定義に関する自由記述文の形態素解析について述べてきたが，両者を比較すると興味深い相違点と共通点がみられる。まず語彙数については，形容詞では差がみられなかったが，動詞や名詞では幸せの経験の方が幸せの定義よりかなり多かった。これは具体的な経験を記憶の中から想起し記述する方が，定義を抽象的にまとめる作業より容易であったためと考えられる。また普段から幸福とは何かについて深く考える機会があまりなく，自分の考えをまとめるための時間が足りず，記述しきれなかった可能性もある。つぎに動詞の頻度については，幸せの経験と定義で大きな違いがみられた。幸せの経験では基本的欲求を表すような「食べる」「寝る」などの動詞が多く出現し，幸せの定義では「感じる」「満たす」など精神的な満足に係わる動詞の頻度が高かった。また他者

からの恩恵を示す「くれる」「もらう」などの動詞は，幸せの経験で多くみられたが，幸せの定義ではみられなかった。共通点としては経験の場合でも定義の場合でも「過ごす」や「笑う」が同程度に出現していた。名詞の頻度についても興味深い違いがみられた。幸せの経験では「ご飯」「風呂」「こたつ」「布団」など物質的な名詞が多く使用され，幸せの定義では「心」「気持ち」「感情」など精神的な名詞が多く使用されていた。共通点としては「家族」「友人」「好きな人」などの頻度がともに高く，身近な人々との関係が幸福感にとって重要な要因であることを示唆している。形容詞については出現する語彙はあまり変わらないが，経験では「おいしい」の頻度が高く，定義では「楽しい」の頻度が高かった。

カテゴリ頻度（幸せの経験） テキストマイニングの手法を活用するためには，自由記述データの中の意味のある語彙に着目し，出現頻度，品詞，類義語，派生語，共起語などの情報をもとにカテゴリを作成する必要がある。そこでまず，幸せの経験に関する質問で得られた自由記述のデータに対して形態素解析を行い，キーワード（語彙）を抽出した。つぎにこれらの語彙の中から意味的に同一の内容を表すと思われる語彙を集め，カテゴリを作成した（表３）。たとえば「友人他」というカテゴリには，「友人」「友達」「友達に会ったとき」「友達に会えたとき」などの語彙が含まれている。なお語彙としての頻度は高くてもカテゴリとしての意味がないと考えられる一般的な語彙，たとえば「いる」「とき」などは除外した。各カテゴリの頻度は全調査対象者96名中何人がそのカテゴリに言及しているかを示している。全部で13のカテゴリが作成された。

もっとも頻度が高かったのは「ご飯他」カテゴリであった。これは「食べる」（動詞），「ご飯」（名詞），「おいしい」（形容詞）などの語彙の頻度が高かったことに対応している。また「友人他」「家族他」「恋人他」などのカテゴリも頻度が高い。名詞の頻出語の中にも「友達」「友人」「家族」「実家」「恋人」「彼氏」などがみられたが，これら身近な人々との交流が女子大学生にとって重要であることが示されている。「寝る他」「話す他」「買う他」「笑う他」などのカテゴリも頻度が高くなっているが，動詞の頻出語の中にこれらの語彙が含まれていることからも納得できる。興味深いのは「ほめられる，認められる他」「のんびり他」「達成，没頭他」「感謝された経験他」などのカテゴリである。これらのカテゴリに入る語彙は単独では頻度が低いが，内容的にまとめるとカテゴリとしての意味を持ってくると考えられる。

カテゴリ頻度（幸せの定義） 幸せの定義についても，形態素解析によって抽出された語彙を意味的な内容ごとに分類し，19のカテゴリを作成した（表４）。ただし分類に際して，頻度

表３　カテゴリ頻度（幸せの経験）

カテゴリ	頻度
ご飯他	67
友人他	62
家族他	50
寝る他	38
話す他	35
恋人他	24
買う他	23
ほめられる，認められる他	19
笑う他	19
のんびり他	16
風呂他	13
達成，没頭他	12
感謝された経験他	12

表４　カテゴリ頻度（幸せの定義）

カテゴリ	頻度
心他	27
家族他	23
つながり他	22
笑う他	21
安心他	21
友人他	20
満足他	19
健康他	17
恋人他	13
理解，好意他	13
あたたかい他	10
食べる他	9
夢中，没頭他	9
夢，目標，希望他	8
必要とされる他	6
話す他	6
充実他	4
寝る他	4
金他	4

が高くてもカテゴリとして意味を持たないと思われる語彙，たとえば「いる」「自分」「幸せ」などは除外した。

もっとも頻度が高かったのは「心他」カテゴリであった。このカテゴリには「心」「気持ち」「感情」など名詞の頻出語が含まれている。したがってカテゴリとしても頻度が高くなっている。また「安心他」も類似したカテゴリであるが，ここには「安心する」「落ち着く」「ほっとする」など心の安らぎを示す語彙が含まれている。「家族他」「友人他」「恋人他」のカテゴリも頻度が高い。やはり幸福とは何かについて考えるとき，身近な人々との関係が重要な意味を持ってくるのであろう。「つながり他」カテゴリには「周りの人」「人間関係」「一緒」などの語彙が含まれている。ここにも人と人のつながりの重要性が見て取れる。また「笑う他」や「健康他」も頻度が高く，笑顔で健康に暮らせることが幸せにつながると考えられていることがわかる。「食べる他」「寝る他」「話す他」のカテゴリは，幸せの経験に比べ幸せの定義では頻度が低くなっている。この現象は語彙の頻度でもみられたが，幸せの経験と定義では基本的欲求の重要性が異なっているという点が興味深い。「あたたかい他」カテゴリには「温かい」「暖かい」「あたたかい」などの語彙が含まれるが，係り受け解析を行うとこれらの語彙は「気持ち」や「心」とつながっていることが多い。幸せの経験では，「温かい」「暖かい」「あたたかい」などの語彙は「ご飯」「飲み物」「風呂」「ふとん」などにかかることが多く，物理的な暖かさを示していると思われるが，幸せの定義では精神的な暖かさを示していると考えられる。「理解，好意他」カテゴリは「理解してくれる人」「好かれること」「価値を認めてもらうこと」などの語彙が含まれており，相手に理解され好意的に受け入れられることの重要性を示唆している。「満足他」カテゴリには「満たす」や「満足する」などの語彙が含まれており，係り受け解析の結果から「心」や「欲求」が満たされている状態であることがわかる。「夢，目標，希望他」カテゴリに属する語彙は，幸せの経験の中ではほとんどみられず，幸せの定義の自由記述で初めて出てきたものが多い。幸せの経験では過去から現在までのことを振り返って回答するため，未来のことにはあまり言及されていないのかもしれない。しかし幸せとは何かを考えるときには，将来に向けての夢や目標，希望を持つことが重要であると認識されているのであろう。

ここまで幸せの経験と定義のカテゴリ頻度について述べてきた。「家族他」「友人他」「恋人他」カテゴリなどは両者に共通してみられ，しかも頻度が高い。身近な人間との係わりが，幸福感を得るうえでいかに重要であるかを示している。また「笑う他」カテゴリも両者に共通しており，笑うということが幸福に結びつく重要な要因であるということを示している。このように類似点もあるが，一方で経験と定義にはカテゴリの種類や頻度に大きな違いもみられた。幸せの経験では「ご飯他」や「寝る他」など基本的欲求を表すカテゴリの頻度が高かったが，幸せの定義では相対的に頻度は低くなっている。また洋服や本，雑貨など物質的なものと結びつく「買う他」カテゴリは，幸せの経験の中で大きな頻度を示しているが，幸せの定義にはみられなかった。一方幸せの定義では「心他」や「安心感他」などの精神的な内容を表すカテゴリの頻度が高い。「あたたかい他」のカテゴリも幸せの定義では精神的な暖かさを示しているが，幸せの経験では物理的な暖かさを示している。また幸せの定義の中には「夢，目標，希望他」という将来を見据えたカテゴリが存在するが，幸せの経験の中には存在しない。これらの結果をまとめると，幸せの経験では物質的，具体的なものが思い浮かびやすく，幸せの定義では精神的，抽象的なものが意識に上りやすいといえるのではないだろうか。また時間軸の観点からみれば，幸せの経験は過去から現在までの出来事が中心であるが，幸せの定義には未来の出来事も含まれているといえよう。

カテゴリの因子分析（幸せの経験） 作成された13のカテゴリについて，調査対象者ごとにそのカテゴリへの言及があれば1，なければ0

表５　因子分析の結果（幸せの経験）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
のんびり他	.822					
風呂他	.803		.141			−.156
友人他		.824				.190
家族他	.228	.563	−.173			−.161
ご飯他			.858			
恋人他	−.164	−.269	.519	−.131		.435
笑う他	−.114	.207	.154	.818		−.161
感謝された経験他	.130	−.137	−.111	.816		.191
達成，没頭他		−.221	−.157		.816	
話す他		.475	.142		.681	−.102
寝る他	.375	−.151	.341		.404	.160
買う他						.801
ほめられる，認められる他	−.224		−.377	.122		.470
説明分散	1.65	1.44	1.40	1.39	1.31	1.25

の数値を割り当てた。この２値データをもとに，カテゴリ間の構造を分析するために探索的因子分析を行った（主成分分析，バリッマクス回転）。固有値の推移ならびに解釈可能性から因子数を６個（累積寄与率65.0％）に決定した（表５）。第１因子は固有値1.83，バリマックス回転後は「のんびり他」および「風呂他」カテゴリに高い因子負荷量を得ている。第２因子は固有値1.61，回転後は「友人他」及び「家族他」カテゴリに高い因子負荷量を得ている。第３因子は固有値1.46，回転後は「ご飯他」および「恋人他」カテゴリに高い因子負荷量を得ている。第４因子は固有値1.27，回転後は「笑う他」および「感謝された経験他」カテゴリに高い因子負荷量を得ている。第５因子は固有値1.20，回転後は「達成，没頭他」および「話す他」カテゴリに高い因子負荷量を得ている。第６因子は固有値1.09，回転後は「買う他」および「ほめられる，認められる他」カテゴリに高い因子負荷量を得ている。

これらの結果はカテゴリ間の結びつきを表している。したがって第１因子は，「風呂」という語彙は「のんびり」に代表される語彙とともに用いられる（記述される）ことが多いということを示唆している。同様に第２因子から「家族」に類する語彙は「友人」に類する語彙とともに使用されることが多いということがわかる。言い換えれば「家族」に類する語彙と「友人」に類する語彙は共起しやすいといえる。実際「家族」に類する語彙を使用した人の74％が「友人」に類する語彙も使用している。第３因子が示す「ご飯他」と「恋人他」との結びつきは興味深い。幸せの経験で「恋人」に類する語彙を使用した人の87.5％，実に９割近くの人が「ご飯他」カテゴリに言及している。第４因子については「感謝された経験他」カテゴリに言及した人の58.3％が「笑う他」カテゴリに言及しており，第５因子については「達成，没頭他」カテゴリに言及した人の66.7％の人が「話す他」カテゴリに言及している。これらもカテゴリ間に存在する関連性を示している。第６因子については「ほめられる，認められる他」カテゴリの因子負荷量が低くなっており，一義的な解釈が困難である。

カテゴリの因子分析（幸せの定義）　幸せの定義についても経験の場合と同様に，作成された19のカテゴリについて，そのカテゴリへの言及があれば１，なければ０の数値を割り当てた。この２値データをもとに，カテゴリ間の構造を分析するために探索的因子分析を行った（主成分分析，バリッマクス回転）。固有値の推移ならびに解釈可能性から因子数を８個（累積寄与率68.3％）に決定した（表６）。第１因子は固有値2.83，バリマックス回転後は「友人他」「恋人他」「金他」「家族他」などのカテゴリに高い因子負荷量を得ている。第２因子は固有値1.98，

表６　因子分析の結果（幸せの定義）

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ
友人他	.871	−.104		.151			.123	
恋人他	.681	.314	.157	.164		.115	−.133	−.164
金他	.626		.214	−.224	.248			.339
家族他	.582	.114	−.290	.457				.149
寝る他		.839						
食べる他	.170	.682	−.262		−.183		.199	
あたたかい他		.525	.456	−.152	.141	−.223		
心他	−.106	−.112	.789		−.216	.273		
安心他	.150	−.131	.672	−.276	.139	−.157	.102	
健康他	.240			.754	−.155			
つながり他				.718	.283	−.141		
必要とされる他			.116		.809			
理解，好意他	.162		−.227		.634		−.193	−.265
満足他	−.209		.211			.809		
充実他	.147		−.155	−.142		.751	−.137	
話す他		−.127		−.192			.820	
笑う他	−.133	.293		.251			.701	−.156
夢中，没頭他		−.225			−.242		−.115	.729
夢，目標，希望他		.277	−.167	.187	.215			.688
説明分散	2.19	1.85	1.70	1.67	1.47	1.44	1.35	1.30

回転後は「寝る他」「食べる他」「あたたかい他」などのカテゴリに高い因子負荷量を得ている。第３因子は固有値1.83，回転後は「心他」および「安心他」カテゴリに高い因子負荷量を得ている。第４因子は固有値1.57，回転後は「健康他」および「つながり他」カテゴリに高い因子負荷量を得ている。第５因子は固有値1.37，回転後は「必要とされる他」および「理解，好意他」カテゴリに高い因子負荷量を得ている。第６因子は固有値1.26，回転後は「満足他」および「充実他」カテゴリに高い因子負荷量を得ている。第７因子は固有値1.18，回転後は「話す他」および「笑う他」カテゴリに高い因子負荷量を得ている。第８因子は固有値1.01，回転後は「夢中，没頭他」および「夢，目標，希望他」カテゴリに高い因子負荷量を得ている。

これらの結果もカテゴリ間の強い関連性を示唆している。第１因子は家族，友人，恋人など身近な人々との関係が幸福感に深く結びついていることを示している。また「金他」カテゴリに言及している人はすべて「友人他」カテゴリに言及しており，「家族他」や「恋人他」への言及も多い。「金他」カテゴリの具体的な記述を見てみると，贅沢をしたいのでお金が沢山ほしいというより，生活に困らない程度のお金が保障されているということに重点が置かれている。したがってお金の心配をすることなく，身近な人々と仲良く暮らすことが幸せの条件の１つであると考えられているようである。第２因子には「寝る他」,「食べる他」,「あたたかい他」などのカテゴリが含まれている。これらのカテゴリはMaslow（1970　小口訳　1987）が述べた基本的欲求の中の生理的欲求に関連するものと考えられる。十分に食べて，寝て，生理的な欲求を満たし，あたたかい気持ちになることが幸せに結びつくと考えられているようである。第３因子には「心他」カテゴリと「安心他」カテゴリが含まれている。この２つのカテゴリに含まれる語彙は共起しやすい。たとえば「安心他」カテゴリに言及した人の57.1％が「心他」カテゴリにも言及している。これらのカテゴリはMaslow（1970　小口訳　1987）が述べた安全の欲求に関連するものと考えられる。安全の欲求もまた基本的欲求の１つであり，心が落ち着いて安心していられる状態が幸福となるために必要であると考えられているようである。第４

因子には「つながり他」および「健康他」カテゴリが含まれている。「つながり他」カテゴリはMaslow（1970　小口訳　1987）が述べた所属の欲求に関連するものと考えられる。幸福であるためには，家族はもちろんのこと友人や近隣，所属する集団など自分の周りの人々とのつながりが重要であり，孤独感や疎外感は幸福感を損なうという可能性を示している。そしてつながりのある人々と，精神的にも肉体的にも健康で共に過ごせることが幸福につながると考えられているようである。第５因子には「必要とされる他」および「理解，好意他」カテゴリが含まれている。これらのカテゴリはMaslow（1970 小口訳　1987）が述べた承認の欲求に関連するものと考えられる。自分が理解され認められること，その結果好意的に受容されさらには頼ってもらえることは，自尊心を高め世の中で役に立っているという感覚をもたらすであろう。このように他者から評価され承認されることは，幸福感を高めることにつながるのではないだろうか。第６因子は満足感や充実感が幸福感と深く結びついていることを示している。さまざまな欲求が満たされ，充実した毎日を送っていることが幸せであるという考えを表している。第７因子には「話す他」および「笑う他」カテゴリが含まれている。「話す他」カテゴリに言及した人の66.7％は「笑う他」カテゴリにも言及しており，笑顔で楽しくお喋りできることが幸せであると感じているようである。第８因子には「夢中，没頭他」カテゴリと「夢，目標，希望他」カテゴリが含まれている。これらのカテゴリはMaslow（1970　小口訳　1987）が述べた自己実現の欲求に関連するものと考えられる。またCsikszentmihalyi（1975，1988）が述べているフロー（flow）の概念とも関連が深い。夢や希望を持ち，それを実現するために目標を立て没頭している状態，夢中になっている状態がすなわち幸福な状態であると考えられているようである。

ここまで幸せの経験と定義についてそれぞれの因子分析の結果を述べてきた。どちらの場合も幸福には低次の欲求から高次の欲求までさまざまな欲求が関連していること，また家族や友人など自分を取り巻く人々との関係が重要な要因となっていることを示している。とくに幸せの定義における因子分析の結果は，Maslow（1970　小口訳　1987）の挙げた基本的欲求の中の生理的欲求から自己実現の欲求まで広く対応しており興味深い。

友人関係項目群の因子分析　本研究で用いた友人関係の尺度は，吉岡（2001）の友人関係測定尺度を参考に，文末表現を変更したものである。吉岡（2001）の尺度は，こうあってほしいと思う理想の友人関係や，日頃の友人との付き合い方について尋ねるものであるが，本研究では実際にそのような友人がいるかどうかに焦点を当てている。したがって因子構造も吉岡（2001）の５因子とは異なっている可能性がある。そこで回答者の認知構造を確認するために，各項目群に対して因子分析（主成分分析，プロマックス回転）を行った。固有値の推移および解釈可能性から因子数を３個（累積寄与率58.1％）に決定した（表７）。第１因子は固有値12.11，プロマックス回転後は「隠し事をしなくてもよい友人がいる」「気持ちが通じ合う友人がいる」「何でも話し合うことができる友人がいる」「自分のことをよくわかってくれる友人がいる」などの項目に高い因子負荷量を得ている。これらの項目はお互いに理解しあっている友人がいることを示している。したがってこの因子を「相互理解」の因子と命名した。第２因子は固有値1.90，プロマックス回転後は「互いに励まし合うことができる友人がいる」「相談し合うことができる友人がいる」「互いに高め合うことができる友人がいる」「互いに尊敬しあうことができる友人がいる」などの項目に高い因子負荷量を得ている。これらの項目はお互いにいい影響を与え合うことができる友人の存在を示している。したがってこの因子を「切磋琢磨」の因子と命名した。第３因子は固有値1.67，プロマックス回転後は「共通の思い出をたくさん作る友人がいる」「いつも一緒に行動する友人がいる」「性格が似ている友人が

表７　友人関係項目群の因子分析結果

		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
隠し事をしなくてもよい友人がいる		.960		-.193
気持ちが通じ合う友人がいる		.787		
何でも話し合うことができる友人がいる		.774		
自分の素直な感情・態度を示すことができる友人がいる		.761		
自分のことをよくわかってくれる友人がいる		.760		.157
いつも自分に関心を持ってくれる友人がいる		.716		.153
心を許すことができる友人がいる		.629	.252	
考えたことや感じたことを正直に話すことができる友人がいる		.563	.111	.164
自分の嫌なところを見せることができる友人がいる		.485		
電話などでよく話す友人がいる		.353		.200
相手にいつも関心を持つことができる友人がいる		.255	.230	.226
互いに励まし合うことができる友人がいる			.848	
相談し合うことができる友人がいる		.266	.822	-.194
互いに高め合う友人がいる		-.153	.747	.146
嫌なことや，悲しいことがあった時になぐさめてくれる友人がいる		.112	.744	-.103
自分の知らないことを教えてくれる友人がいる			.702	
互いに尊敬しあうことができる友人がいる		.151	.687	
まじめな話ができる友人がいる			.681	.170
将来の夢や希望について話し合う友人がいる		.105	.631	
いろいろな面で刺激を与えてくれる友人がいる		-.256	.608	.212
互いに弱い部分を見せ合うことができる友人がいる		.397	.473	-.211
考え方や感じ方が似ている友人がいる		.282	.313	.258
共通の思い出をたくさん作る友人がいる				.831
いつも一緒に行動する友人がいる		.120	-.130	.675
性格が似ている友人がいる		.143		.554
プレゼントをくれる友人がいる		-.183	.219	.545
趣味や好みが一致している友人がいる		.161	.122	.257
説明分散	Ⅰ	—	.706	.568
	Ⅱ		—	.566
	Ⅲ			—

いる」などの項目に高い因子負荷量を得ている。これらの項目は自分と友人との趣味や性格の共通性を示している。そこでこの因子を「共通・一緒」の因子と命名した。各因子について因子負荷量が.500より大きい項目をその因子に所属するものとし，因子内の項目の平均点（下位尺度得点）を算出した。

言及されたカテゴリ数と幸福感の相関　幸福感が高い人は，自由記述の中で幸せの経験について多く語っているのではないかと考えられる。また幸せの定義についても多くのカテゴリを挙げているのではないかと考えられる。そこでこの問題を検討するために，まず回答者ごとに幸せの経験と定義の中で言及されているカテゴリ数をそれぞれ集計した。幸福感についてはハッピネス尺度12項目の合計点を算出した。カテゴリ数と幸福感の相関係数を求めたところ，幸せの経験では $r = .123$，幸せの定義では $r = .139$ となって，どちらの場合も有意ではなかった。したがって言及されたカテゴリ数と幸福感には関連性がみられないということになる。この結果から幸福感は，幸せを感じるカテゴリの多さではないことが明らかとなった。

自由記述における言及の有無と友人関係および幸福感との関連　自由記述の中で友人について述べているということは，友人関係の認識や幸福感の認識とどのような係わりを持っているのであろうか。幸せの経験や定義で友人について言及することは，幸せを考える上で友人関係を重視しているとも考えられる。そこで「友人他」カテゴリに言及することが，幸福感や友人関係の認識にどのような影響を与えているかを検討するために，言及の有無を独立変数とし，友人関係３因子の下位尺度得点および幸福感を従属変数とするｔ検定を行った（表８）。幸せの経験および幸せの定義において，友人関係の

表８　友人カテゴリへの言及の有無群別にみた各要因の平均（標準偏差）と t 検定の結果

	幸せの経験				幸せの定義			
	言及有群（N=62）	言及無群（N=34）	t 値	df	言及有群（N=20）	言及無群（N=76）	t 値	df
相互理解	4.22(0.69)	4.09（0.85）	0.85	94	4.27（0.74）	4.15（0.76）	0.62	94
切磋琢磨	4.35(0.61)	4.24（0.74）	0.83	94	4.21（0.70）	4.34（0.65）	0.78	94
共通・一緒	4.21(0.69)	4.09（0.82）	0.80	94	4.03（0.87）	4.21（0.70）	0.99	94
幸福感	39.60(8.28)	40.44（8.58）	0.47	94	41.40（7.83）	39.50（8.49）	0.90	94

** p<.01，* p<.05

３因子に言及の有無による差はみられなかった。したがって「友人他」カテゴリへの言及があるからといって，友人関係の認識が異なるわけではないということになる。また幸福感についても言及の有無による差はみられなかった。

自由記述における言及の有無と恋愛イメージ及び幸福感との関連　幸せの経験や定義の自由記述の中に恋人についての言及があるということは，幸せを考える上で恋人との関係を重視していることの表れでもあると考えられる。そこで「恋人他」カテゴリに言及することが，幸福感や恋愛イメージの認識にどのような影響を与えているかを検討するために，言及の有無を独立変数とし，恋愛イメージ７因子の下位尺度得点および幸福感を従属変数とする t 検定を行った（表９）。幸せの経験においては，「大切・必要」「利那的・付加価値」「相互関係」の３因子に言及の有無による有意差がみられた。「恋人他」カテゴリへ言及した群はしなかった群より恋愛をより大切で必要なものと認識しており，また恋愛において相互関係が重要であると認識していた。恋愛を利那的なものであり付加価値に過ぎないと考える傾向は，「恋人他」カテゴリへの言及がない群の方が高かった。幸せの定義においては，「利那的・付加価値」および「相互関係」の２因子に有意差がみられた。幸せの経験の場合と同じように「恋人」カテゴリへ言及した群はしなかった群より，恋愛における相互関係の重要性を高く認識しており，恋愛を利那的なものであり付加価値に過ぎないと考える傾向は低かった。また幸福感についても有意差がみられた。「恋人他」カテゴリへ言及した群の方がしなかった群より幸福感が高かった。これらの結果は「恋人他」カテゴリへの言及がある群は，恋愛に対してよいイメージを抱いており，より大きな幸福感を抱いているという可能性を示している。

表９　恋人カテゴリへの言及の有無群別にみた各要因の平均（標準偏差）と t 検定の結果

	幸せの経験				幸せの定義			
	言及有群（N=24）	言及無群（N=72）	t 値	df	言及有群（N=13）	言及無群（N=83）	t 値	df
大切・必要	3.99（0.77）	3.28（0.82）	3.75**	94	3.79（0.58）	3.40（0.89）	1.53	94
利那的・付加価値	1.90（0.57）	2.29（0.81）	2.19*	56.7	1.68（0.59）	2.27（0.77）	2.63**	94
相互関係	4.73（0.48）	4.36（0.54）	3.01**	94	4.71（0.41）	4.41（0.56）	2.36*	19.8
独占・束縛	3.26（0.90）	3.31（0.84）	0.25	94	3.44（0.95）	3.28（0.84）	0.61	94
衝動・盲目的	3.47（0.85）	3.07（0.99）	1.79	94	3.15（0.92）	3.17（0.98）	0.07	94
献身的	3.19（0.94）	3.06（0.80）	0.68	94	3.05（0.90）	3.10（0.83）	0.20	94
成長	4.26（0.50）	4.34（0.62）	0.57	94	4.23（0.53）	4.34（0.60）	0.61	94
幸福感	40.71（8.78）	39.63（8.25）	0.55	94	43.69（5.00）	39.30（8.63）	2.61*	25.0

** p<.01，* p<.05

表10　重回帰分析の結果（友人関係）

	β	有意確率
相互理解	.284	.033
切磋琢磨	.179	.169
共通・一緒	.068	.551
重相関係数（*R*）	.469	.000

友人関係が幸福感に与える影響　友人関係に対する認識が幸福感にどのような影響を与えているかを検討するために，友人関係の３因子を説明変数とし，幸福感を目的変数とする一括投入方式の重回帰分析を行った（表10）。「相互理解」の因子は幸福感に有意な正の影響を与えていた。したがってお互いに理解しあっている友人がいると感じている人ほど幸福感が高いといえる。「切磋琢磨」や「共通・一緒」の因子の標準偏回帰係数（β）は有意ではなかった。したがって単に友人がいるというだけでは不十分であり，お互いに分かり合える友人がいるかどうかが幸福感と強く係わってくるということを示唆している。

恋愛イメージが幸福感に与える影響　恋愛に対するイメージが幸福感にどのような影響を与えているかを検討するために重回帰分析を行った。恋愛イメージの７因子について相関係数を求めたところ，「相互関係」と「刹那的・付加価値」因子の間に高い相関がみられ，多重共線性が疑われた。そこで「刹那的・付加価値」因子を除いた６因子を説明変数とし，幸福感を目的変数とする一括投入方式の重回帰分析を行った（表11）。「大切・必要」因子と「相互関係」の因子が幸福感に有意な正の影響を与えていた。したがって恋愛を生きていくために必要で大切なものだと思っている人ほど，また恋愛はお互いを助け合い思いやることだと思っている人ほど幸福感が高いということを示している。さらに有意傾向ではあるが，「独占・束縛」と「献身的」の因子は幸福感に負の影響を与えていた。これは恋愛は相手を独占し束縛してしまうものだと思っている人ほど，また恋愛は相手のために自分を犠牲にすることだと思っている人ほど幸福感が低くなるという可能性を示している。これらの結果は，女子大学生にとって恋愛に対するイメージは幸福感につながる重要なものであり，恋愛に対してよいイメージを持つことが幸福感にもつながるということを示唆している。

表11　重回帰分析の結果（恋愛イメージ）

	β	有意確率
大切・必要	.262	.015
相互関係	.215	.050
独占・束縛	−.187	.093
衝動・盲目的	.087	.449
献身的	−.185	.098
成長	.171	.112
重相関係数（*R*）	.475	.001

職業未決定が幸福感に与える影響　職業未決定の５因子について，まず下位項目（３項目）の単純加算による尺度得点を算出した。つぎに職業未決定が人生の幸福感に与える影響を検討するために，職業未決定の５因子を説明変数とし，幸福感を目的変数とする重回帰分析を行った（表12）。「未熟」および「安直」因子は幸福感に有意な負の影響を与えていた。したがって職業意識が未熟なために将来の見通しがなく，職業選択に取り組めない状態であれば幸福感は低下するということを示している。また自らの関心や興味を職業選択に結び付けていこうという努力をしない安直な態度も，幸福感を低下させる要因であることを示している。一方「模索」因子は幸福感に有意な正の影響を与えていた。したがって職業がまだ決まっていなくても，職業選択に向けて積極的に模索している状態であれば，幸福感は高くなるということを示している。これらの結果は吉村（2009，2012，2013）の結果と類似しており，キャリア意識の形成が幸福感の獲得に大きな影響を与えていることを

表12　重回帰分析の結果（職業未決定）

	β	有意確率
未熟	−.319	.012
混乱	−.072	.547
猶予	.096	.373
模索	.190	.044
安直	−.208	.047
重相関係数（*R*）	.494	.000

示唆している。

まとめと今後の課題

本研究の目的はテキストマイニングの手法を用いて，女子大学生における幸福の概念を検討することであった。また女子大学生にとっての発達課題でもある友人や異性との関係，およびキャリア意識の発達が，幸福感にどのような影響を与えているかについても検討を行った。

分析に用いたテキストデータは，幸せの経験と幸せの定義に関する質問で得られた自由記述式回答文である。頻出語の分析により，幸せの経験では「食べる」「寝る」などの基本的欲求に関する動詞，「話す」「会う」などのコミュニケーションに関する動詞，「くれる」「もらう」など他者からの行為を表す動詞などが多いという特徴がみられた。また「友人」「家族」「恋人」など自分を取り巻く身近な人々を示す名詞も多くみられた。形容詞としては「おいしい」や「あたたかい」という語の頻度が高かった。幸せの定義では「感じる」［満たす］などの感覚を表す動詞が頻出していた。また経験ではほとんど出現しなかった「生きる」という動詞も，定義ではかなり出現していた。名詞では「家族」「友人」「好きな人」など身近な人々を示す語や，「心」「気持ち」「感情」など心理的，精神的な語の出現頻度が高かった。

それぞれの頻出語を比較すると，幸せの経験と定義には興味深い相違点と共通点がみられた。まず相違点に注目すると，幸せの経験では「食べる」「寝る」などの基本的欲求を表す動詞が多く出現し，幸せの定義では「感じる」「満たす」などの精神的な満足に係わる動詞が多かった。他者からの恩恵を示す「くれる」「もらう」などの動詞は幸せの経験では多くみられたが，幸せの定義ではみられなかった。また名詞についても幸せの経験では「ご飯」「風呂」「こたつ」「布団」など物質的な名詞が多く使用され，幸せの定義では「心」「気持ち」「感情」など精神的な名詞が多く使用されていた。形容詞では経験で「おいしい」の頻度が高く，定義で「楽しい」の頻度が高かった。共通点に注目すると「過ごす」や「笑う」は経験でも定義でも同程度に出現していた。また「家族」「友人」「好きな人」などの頻度は経験でも定義でもともに高く，身近な人々との関係が幸福感にとって重要な要因であることを示している。

頻出語の分析により興味深い結果が得られたが，語彙レベルの分析だけでは重要な情報を見逃してしまう可能性がある。たとえば出現頻度が１であり単独では意味の無いような語であっても，同じような意味を持つ語を集めて１つのカテゴリを作れば，そのカテゴリが重要な意味を持ってくる場合がある。幸せの経験における「達成，没頭他」や定義における「夢，目標，希望他」などのカテゴリがその例である。したがってテキストマイニングにおいてはカテゴリの作成と分析が重要となってくる。本研究では幸せの経験について13のカテゴリ，定義については19のカテゴリが作成された。

幸せの経験および定義におけるカテゴリ頻度の分析から興味深い共通点と相違点が明らかとなった。共通点としてはまず「家族他」「友人他」「恋人他」など身近な人々とのつながりを示すカテゴリが，どちらの場合でもみられ，かつ頻度が高かった。また「笑う他」というカテゴリも共通してみられた。相違点としては「ご飯他」や「寝る他」など基本的欲求を表すカテゴリや，物質的なものと結びつく「買う他」カテゴリは幸せの経験で頻度が高かった。しかし幸せの定義では相対的に頻度が低いか，またはカテゴリそのものが存在しなかった。一方精神的な内容を示す「心他」「安心他」などのカテゴリは，幸せの定義ではみられたが経験ではみられなかった。また「夢，目標，希望他」という将来に関するカテゴリも幸せの定義には存在するが，経験には存在しなかった。したがって幸せの経験では物質的，具体的なものが多く言及され，幸せの定義では精神的，抽象的なものが言及されやすいといえよう。また幸せの経験では過去から現在までの範囲が言及の対象となりやすいが，幸せの定義では未来を含んだ幅広い範囲が対象となるといえよう。

カテゴリに関しては頻度だけでなく，カテゴリ間の関連性にも注目して分析を行った。本研究ではカテゴリ間の構造を分析するために探索的因子分析を行ったが，この結果は非常に興味深いものであった。幸せの経験では6因子，幸せの定義では8因子が得られたが，それぞれカテゴリ間のさまざまな結びつきを示している。とくに「家族他」カテゴリと「友人他」カテゴリの結びつきは強く，このカテゴリから構成される因子は幸せの経験においても定義においても共にみられた。この結果は家族や友人など自分を取り巻く人々との関係が幸福を感じる上で重要な要因となっていることを示している。また幸せの定義においてはMaslow（1970　小口訳 1987）が述べた生理的欲求，安全の欲求，所属の欲求，承認の欲求，自己実現の欲求にそれぞれ対応すると考えられる因子が抽出されており注目に値する。これらの結果は幸福には低次の欲求から高次の欲求までさまざまな要因が関連することを示している。

以上の結果は幸せの概念を構成する要素が多様であること，そして質問文の違い（経験か定義か）によって意識に上る要素が異なってくるという可能性を示している。また要素間には興味深い構造が存在するということを示している。「幸福」の意味について検討する場合には，この点について十分配慮する必要があると思われる。

本研究ではさらに，自由記述の分析から得られた知見と各測定尺度との関連性についても検討を行った。最初に自由記述の中で言及されたカテゴリ数と尺度によって測定された幸福感との関連性を検討するために相関分析を行った。しかしながら幸せの経験においても定義においても有意な相関は得られなかった。したがって幸せを感じるカテゴリが多いほど幸福感が高くなるとは言えないことになる。とくに幸せの定義において相関がみられなかったことは，あるカテゴリへの言及とそのカテゴリでの満足感は異なるということを示唆している。つまりあるカテゴリを重要だと考え言及したとしても，そのカテゴリの内容にどの程度満足しているかは人によって異なる可能性がある。

次に「友人他」カテゴリへの言及が友人関係の認識や幸福感とどのような係わりを持っているかを検討するためにt検定を行ったが，言及の有無による有意差は見られなかった。したがって自由記述の中に「友人他」カテゴリへの言及があろうとなかろうと，友人関係の認識や幸福感の認識に差はないということになる。

また「恋人他」カテゴリについても，自由記述における言及の有無と恋愛イメージや幸福感との関連性を検討するためにt検定を行った。幸せの経験においても幸せの定義においても興味深い結果が得られた。幸せの経験で「恋人他」カテゴリに言及した学生はしなかった学生より恋愛をより大切で必要なものと認識しており，かつ相互関係が重要であると考えていた。しかし恋愛を刹那的なものであり付加価値に過ぎないと考える傾向は低かった。さらに幸せの定義で「恋人他」カテゴリに言及した学生も，恋愛における相互関係の重要性を高く認識しており，恋愛を刹那的なものであり付加価値に過ぎないと考える傾向は低かった。また幸福感も「恋人他」カテゴリに言及した学生の方が高かった。したがって「恋人他」カテゴリへの言及がある学生は，恋愛に対してよいイメージを抱いており，より大きな幸福感を抱いているということになる。これらの結果は女子大学生において恋人との関係をどのように捉えるかという異性関係の認識が，幸福感と深く係わっていることを示している。

以上の結果はテキストマイニングの手法を用いて得られたものであるが，本研究ではさらに女子大学生の幸福感に影響を与える要因について，発達課題の観点から検討を行った。Havighurst（1953　荘司訳　1995）は青年期の重要な発達課題として「同年齢の男女との洗練された新しい交際を学ぶこと」，「結婚と家庭生活の準備をすること」，「職業を選択し準備すること」などを挙げている。そこで本研究では友人関係，恋愛イメージ，キャリア意識などが幸福感にどのような影響を与えているかについて，重回帰分析を用いて検討した。

友人関係の３因子の中で「切磋琢磨」と「共通・一緒」の因子は幸福感に有意な影響を与えていなかった。しかし「相互理解」の因子は有意な正の影響を与えていた。したがって単に友人がいるというだけでは不十分であり，自分のことを理解してくれる友人や何でも話し合える友人がいるということが，幸福感に大きく作用していると考えられる。

恋愛イメージについては「大切・必要」と「相互関係」の因子が幸福感に有意な正の影響を与えていた。また「独占・束縛」と「献身的」の因子は有意傾向であるものの，幸福感に負の影響を与えていた。したがって恋愛を生きていくために必要なもので，心の支えになると思っている人や，恋愛とは相手を思いやることで，信頼感が大切だと思っている人ほど，幸福感が高いということになる。これに対して恋愛は相手を束縛するものだと思っている人や，自分を犠牲にすることだと思っている人は，幸福感が低くなるという傾向がみられた。これらの結果は女子大学生において恋愛に対するイメージは重要なものであり，よいイメージを持つことが幸福感につながるという可能性を示している。

キャリア意識については職業未決定の「未熟」因子と「安直」因子が，幸福感に有意な負の影響を与えていた。また「模索」因子は有意な正の影響を与えていた。したがって職業意識が未熟で将来の見通しがなく，職業選択に取り組めない状態や，自分の適性を深く考えず，就職できればどこでもいいという安直な態度は，幸福感を低下させる要因となる。しかし職業がまだ決まっていなくても職業選択に向けて積極的に模索している状態であれば，幸福感は高くなる可能性がある。以上の結果は青年期の発達課題である友人関係，異性関係および職業選択の各要因が，幸福感の形成に大きな影響を与えていることを示している。

最後に今後の課題についていくつか述べたい。本研究ではテキストマイニングの手法を用いて幸福の概念について検討を加え，興味深い結果を得ることができた。しかしながら分析の手法についてはさらに工夫を重ねる余地があると思われる。たとえば形態素解析の結果からカテゴリを作成する過程は，分析結果を左右する重要な作業であり，当該分野における十分な知識と経験に基づいた判断が必要となる。したがって今回作成されたカテゴリも暫定的なものであり，有用なカテゴリの発掘に向けて今後も検討を重ねることが重要であると思われる。

また本研究ではカテゴリの因子分析の結果から，幸福の概念を構成するさまざまな要因を明らかにすることができた。今後はこれらの知見を基礎資料として，幸福感の構成概念について理論的な検討を行う必要がある。さらにその概念を測定する具体的な尺度についても検討を行い，操作的な定義を明確にすることが求められる。

青年期の発達課題については，友人関係，異性関係，キャリア意識などを取り上げ，これらの要因が幸福感にどのような影響を与えているかについて検討を行った。しかしながら本研究の調査対象者はすべて女性であり男性は含まれていない。だが青年期の発達課題に対する認識や幸福感との関連性は，男性と女性で異なる可能性がある。したがって今後は男子大学生も含めた大学生全体を対象とする調査を行い，青年期の発達課題と幸福感の関係ついて検討を行うことが必要であろう。

引用文献

Csikszentmihalyi, M. (1975). *Beyond boredom and anxiety*. San Francisco : Jossey-Bass.

Csikszentmihalyi, M. (1988). The flow experience and its significance for human psychology. In M. Csikszentmihalyi & I. S. Csikszentmihalyi (Eds.), *Optimal experience: Psychological studies of flow in consciousness*. Cambridge : Cambridge University Press. pp. 15−33.

Diener, E. (1984). Subjective well-being. *Psychological Bulletin*, **95**, 542−547.

Havighurst, R. J. (1953). *Human development and education*. New York : Longmans, Green.
（ハヴィガースト，R. J. 荘司雅子（監訳）(1995).

人間の発達課題と教育　玉川大学出版部）

Huppert, F. A., & Linley, P. A.（Eds.）（2011）. *Happiness and well-being : Critical concepts in psychology*. Vol. 1. *Concepts in happiness and well-being*. Abingdon : Routledge.

金政裕司（2002）．恋愛イメージ尺度の作成とその検証――親密な異性関係,成人の愛着スタイルとの関係から――　対人社会心理学研究，**2**，93−101.

金谷治（訳注）（1963）．論語　岩波文庫

Kashdan, T. B., Biswa-Diener, R. & King, L. A.（2008）. Reconsidering happiness : The costs of distinguishing between hedonic and eudaimonia. *Journal of Positive Psychology*, **3**, 219−233.

Maslow, A. H.（1970）. *Motivation and personality*. 2nd ed. Harper & Raw.
（マズロー，A. H.　小口忠彦（訳）（1987）人間性の心理学　産業能率大学出版部）

McGregor, I. & Little, B. R.,（1998）. Personal projects, happiness, and meaning : On doing well and being yourself. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 494−512.

Ryan, R. M. & Deci, E. L.（2001）. On happiness and human potentials: A review of research on hedonic and eudaimonic well-being. *Annual Review of Psychology*, **52**, 141−166.

Ryff, C. D.（1989）. Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 1069−1081.

下山晴彦（1986）．大学生の職業未決定の研究　教育心理学研究，**34**，20−30.

Waterman, A. S.（1993）. Two conceptions of happiness : Contrasts of personal expressiveness（eudaimonia）and hedonic enjoyment. *Journal of Personality and Social Psychology*. **64**, 678−691.

吉森譲・植田智・有倉巳幸（1992）．ハッピネスに関する社会心理学的研究（1）―ハッピネス尺度の開発―　日本心理学会第56回大会発表論文集，189.

吉村英（2009）．キャリア意識の形成が大学生活の満足感に及ぼす影響　京都女子大学発達教育学研究，**3**，23−33.

吉村英（2012）．韓国女子大学生のキャリア意識と大学生活の満足感および幸福感　京都女子大学発達教育学研究，**6**，41−60.

吉村英（2014）．女子大学生のキャリア意識と幸福感――学部間の比較――　京都女子大学発達教育学研究，**8**，31−53.

吉岡和子（2001）．友人関係の理想と現実のズレ及び自己受容から捉えた友人関係の満足感　青年心理学研究，**13**，13−30.